



## 上村 真之介 著 『町医者の中で 父が示した地域医療の可能性』を読む

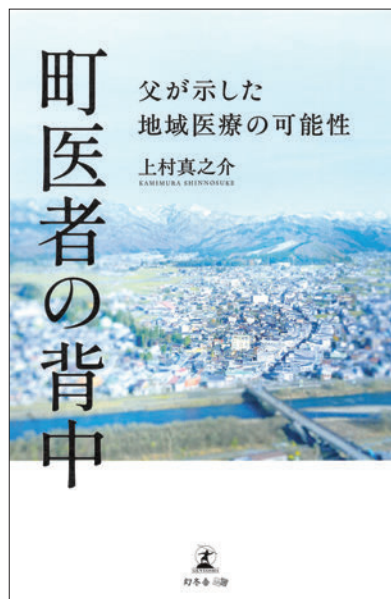
新潟県医師会

理事 小 柳 亮

本書は、一人の町医者姿を追った回想録であると同時に、地域医療の本質をあらためて考えさせる実践の書でもある。著者は、魚沼の地で長年地域に根ざしてきた上村医院の歩みを、父の背中を見て育った立場から丁寧に描き出している。しかし本書の価値は、単なる家族史や美談にとどまらない。そこには、地域医療とは何か、町医者とは地域でどのような役割を担う存在なのかという、時代が変わってもなお重要な問いが、本書の底に息づいている。

本書の構成は明快である。第1章で町医者の原風景と地域へのまなざしを示し、第2章「みまもる」では、患者個人のみならず家族や生活背景まで含めて支える視点が語られる。第3章「予防する」では、糖尿病対策「プロジェクト8」やフレイル予防など、重症化予防を地域ぐるみで進める実践が紹介される。さらに第4章「仕組みをつくる」では看取りや介護との連携、第5章「育てる」では「地域医療魚沼学校」に象徴される人材育成と住民参加、第6章では125年の歴史と信頼の風土が地域医療を支えてきた背景が論じられている。理念ではなく、課題発見から制度化、人材育成までを一続きの営みとして示している点が、本書の大きな特色である。

とりわけ印象的なのは、地域医療を「診る」ことだけでなく、「みまもる」「つなぐ」「育てる」ことまで含めて捉えている点である。本書に描かれる町医者は、診察室の中だけで完結する存在ではない。住民の暮らしの場に目を向け、予防へ働きかけ、必要な仕組みをつくり、次の担い手を育てる。その姿は、医師法第一条のいう「医師は、医療及び保健指導を掌ることによつて公衆衛生の向上及び増進に寄与し、もつて国民の健康な生活



出版社：幻冬舎 価格：1,760円（税込）

を確保するものとする」を、地域の現場で愚直に体現するものといえるだろう。

また本書は、地域医療を支えるものが制度や補助金だけではなく、長い年月の中で培われた信頼の風土であることも教えてくれる。魚沼だからこそ可能であった面はあるとしても、著者自身が述べるように、そこで示された工夫や姿勢には他地域でも学び得る普遍性がある。人口減少、医師偏在、在宅医療の負担増、医療・介護連携の難しさなど、各地が共通して抱える課題に対し、本書は抽象論ではなく、地域から始める実践の手がかりを与えてくれる。

新潟県において地域医療を担う私たちにとって、本書は懐旧の書ではない。むしろ、これからの地域医療をどう守り、どう次世代へ手渡すかを考えるための示唆に富む一冊である。地域に根ざす医療の価値をあらためて見つめ直したい医師、行政、介護関係者、そして地域住民にも広く薦めたい。